

山と博物館

第26巻 第6号

1981年 6月25日

大町山岳博物館



剣岳の夜明け 撮影 齊藤忠彦

夏山と私

私のふるさと大町も長い冬と近年まれに見る豪雪に驚いたが、青葉若葉の今となると、それがまったく違うような気がします。

今では北アルプスの山々の雪がとけ、谷川にそそぎ、周囲の緑は深くなり、せせらぎの中に小鳥の音がさわやかに響く初夏の候を迎えている。

私は今でも機会あるごとに北アルプスに出かける。それを見て周囲の人達は年がいてもなくとて山に行くのかといひます。

美しい自然や山なみに囲まれた中で生を受け、そこに住み、そこから朝夕眺める後立山連峰は私にとつてはかけがえのないものなのです。

私はその美しさに魅せられて今までの長い間山歩きをしてきました。

一歩／＼踏みしめて登り頂上に立つ時、夕日にあかね色に染まる山々を見る時、雲海の彼方に昇るご来光を望む時、お花畑に咲き乱れる数々の高山植物をめでる時、私の心は充実にあふれるのです。

その美しさは四季折々に変化していく、私はその人の手の加えられていない自然の中に身を置く時、それは私にとつて何んとも云えない幸福感を与えてくれるのです。

自然や山は美しいばかりではない、私自身も山の中で恐しい体験を何回となくしました。私はそのひとつひとつを教訓として、山へ登る時の心のいましめにしていきます。

現在は登山者の数が多くなり、それにつれて心ない登山者も増えていきます。山は多くの人達が他では得られないものを求めてやってくるのです。山の道徳と掟を守り、みんなのものとして大切にしてみたいのです。

生涯を山に捧げた諸先輩の功績を忘れてはなりません。また残されたそれらを私たちは守り、子孫に残してやるのが私たち北アルプスの麓に生を受けた者の義務だと思います。

(大町山岳会員 西沢敬夫)

中山沢

三井嘉雄

吹雪の常念岳で二重遭難が起きたのは、昭和七年三月の末のことだった。
金光準人と成定喜代治は塚田清治を案内にして穂高岳から常念岳にまわったのだが、入山から二週間もたったのを気づかされた有明の捜索隊によって、常念小屋で虫の息でいた成定のみが生還したのだった。そして、その捜索に向かった山笠三郎と有明登山案内人組合のガイド中山彦一と高橋益二の三人が冷沢の大雪崩で帰らぬ人となってしまった。

山笠三郎は、それより二年前の八月に単身で剣岳のチンネ左稜線を完登して、初めての人跡を残したことで知られていた。この尾根は、昭和四年になって三高パーティーが通り、赤錆びた山笠のハーケンを発見している。

常念岳の二重遭難は山麓では大変な騒ぎとなり、当時の有明村では深夜に村議会が召集されるありさまだった。この捜索には、松本笹部飛行場から有名な長谷川飛行士が複葉機で飛び立って、空から救援物資を投下したことも話題をまいた。長谷川はそれ以前にも山岳飛行をやっていたようで、白馬岳正面尾根などの航空写真が残っている。

信濃毎日新聞も三月二十六日付から連日の報道をし、中山彦一については、「有明案内人組合に於ける山通としての第一人者で殊に中山君はロッククライミングの達人でその右に出づるものがない」と伝えている。

また日本山岳会の重鎮、吉沢一郎も「北の山・南の山」の中でこの遭難をとりあげて、「N、K、塚田の遭難の為に日本アルプス有数のガイドたる中山彦一と高橋益二の両者をな

くしてしまつた事である」として残念がつている。中山は享年四十四才であった。そして、たしかに彼のロッククライミングには目を見はらせるものがあった。

中山彦一の名がはじめて文献に表われたのは、加藤文太郎が大正六年の元旦、鹿島槍に登ったときの記録の中である。頂上に中山の名刺が置いてあったという。鹿島槍ヶ岳の積雪期初登はんが大正十五年であるとされているが、それよりずっと遡っている。その加藤も、昭和十一年の正月、槍ヶ岳から北鎌尾根に向かったまま消息を断つてしまった。いつも単独行で、足の速さでも定評があった。朝西岳小屋を出て槍ヶ岳の穂先に立ち、上高地から徳本峠を越えて、その日のうちに島々駅まで来たことさえあった。

大正十年、浦松佐美太郎が燕ヶ槍を歩いたときには、中山が山案内をし浦松を感激させた。

「そのときの登山に連れて歩いた中山彦一には、燕岳から、槍ヶ岳、乗鞍岳と、一週間にもわたって一緒にいるうちに、その人柄にすっかり魅惑されてしまった。外面は温厚そのものなのだが、内面は実にしっかりしており、勇敢でもあった。」

長谷川機荒天衝き

低空旋回捜索

けふは上空から

食糧品防寒具を投下する

【本誌記者】常念岳の遭難事件の三日三夜、捜索隊は常念小屋に到着して、捜索隊は常念小屋と隣りつ、環状付近に至つて四百メートルの低空で旋回飛行を試みたが相増北アルプス一帯は猛烈な吹雪で目的を果す引返したが三月十日に吹雪がやみ、捜索隊は再び上空から捜索隊をアルプス一帯に投下して捜索隊に物資を投下した。

悲しき山の犠牲者……よら捜索隊 中山彦一、塚田清治の遺影



アツといふ間に

埋没せよ

奇蹟的に命拾ひ

塚田、耳塚両君語る

【本誌記者】中山彦一、塚田清治の遭難事件は、信濃毎日新聞に掲載された。その記事は、中山彦一、塚田清治の遺影を掲載し、その遭難の経緯を詳しく説明している。また、塚田清治、耳塚清治の両氏が、この遭難の経緯を語り、その奇蹟的な命拾ひについて詳しく説明している。

二十日午後六時、常念小屋へ来た。その時、中山彦一、塚田清治の遺影を掲載し、その遭難の経緯を詳しく説明している。また、塚田清治、耳塚清治の両氏が、この遭難の経緯を語り、その奇蹟的な命拾ひについて詳しく説明している。

長谷川機が捜索を伝える当時の新聞(提供 信濃毎日新聞社)

「そのときの登山に連れて歩いた中山彦一には、燕岳から、槍ヶ岳、乗鞍岳と、一週間にもわたって一緒にいるうちに、その人柄にすっかり魅惑されてしまった。外面は温厚そのものなのだが、内面は実にしっかりしており、勇敢でもあった。」

はこの登はんについては記録を残していないから、松高の推測どおりかも知れない。
中山彦一が面目を發揮したのは、大正十一年のことであった。八月の末頃のこと、ハーケンも打ち込まず単身で槍ヶ岳の小槍に登つたのである。残念なことに、これも文章にはならず日付さえ判明しないが、その前年に燕小屋を開業した赤沼千尋には報告があったようである。日付がはっきりすれば、あるいは中山は小槍の初登頂者となるかも知れない。この点については穂高町のご遺族にも伺ってみたが、何も聞かされていないということだ。ただ、小槍に登ったという事実は確かなことだ。大正十四年に槍ヶ岳から北鎌尾根に向かった西田誠一によると、「小槍登はんで有名な中山彦市を連れ牛首岳の南より貧乏沢を下り天上沢に露営」という記述をみても、文字は間違っているが、まさに本人の証言であり信頼できる。

それから、昭和二年七月に槍ヶ岳の西にある硫黄尾根を初縦走した馬場忠三郎と杉浦武夫は、ここでも小槍は中山が初登はんしたと信じられていた。その杉浦は、それから三年後に小槍の第三テラスから転落して、早世してしまつた。

小槍の初登はん者は土橋莊三と寺島今朝一である。大正十一年八月二十六日だった。中山の登はんは、それより数日後といわれているが、その出典は不明である。翌十二年になって佐藤久一郎のパーティーが一時間三十五分登つて、はじめての文献として発表された。二十五メートルのザイルを使ったという。このとき一緒に登った青木勝と佐藤は、次の年には前穂高北尾根の初登はん者となるのであつた。

さらに小槍には秩父宮も登られている。昭和二年八月のことで、小槍の登山史の中でも極く早い時期である。このときの登山については殿下自身も、「日本アルプスの八日間」と題して皇宮内の雑誌「近き御垣」に掲載



救助隊の遭難を伝える記事(信濃毎日新聞社提供)

されていると聞いたので問合わせたが、秩父宮家でも宮内庁図書館でも蔵書は見当たらないとのこと返事であった。その年の七月には伊藤藤原が単独登山に成功しているが、ハーケンを打った時間も入れて、大槍と鞍部からわずかに七分で登ってしまった。

中山はその後小槍に挑み、昭和四年七月には高橋栄一郎、小出博とともに小槍の西壁と北壁から登はんした。高橋によると、大正十五年と昭和四年に合せて十数回小槍に立ったということなので、中山もこの中でかなり参加していると考えられる。

その間にも、中山彦一は小槍ばかりではなく活躍が伝えられている。大正十三年四月には百瀬慎太郎と雪の槍ヶ岳から黒部五郎岳へ、昭和二年七月には旧制松本高校の橋爪たちを案内して、燕岳団衛谷を登山者として初めて下降したのであった。また昭和二年に、土橋莊三らとともに硫黄尾根の赤岳の初登はん者となったし、昭和六年十二月には、三谷慶三といっしょに常念岳に登っている。この

三谷は翌七年三月、奇しくも中山の死と前後して槍ヶ岳の大槍小屋付近で遭難して逝ってしまった。

硫黄尾根赤岳の初登はんは、土橋莊三、高橋栄一郎とガイドの中山彦一、大和由松、近藤一雄の五人によるものだった。土橋は、例の小槍初登はん者の一人である。そして、この赤岳登山はそれから十五日して、硫黄尾根を初縦走した馬場忠三郎たちによって証明された。

「赤岳独立標高点には、鉋をかけた一枚の板に(昭和二年六月三十日午前十時、千丈沢のベースキャンプより中山沢を登りて)と書いて五人の名が記されたものが積石の間に入っていた。(中山沢)とは赤沢と自分達が言っている沢のことらしい。

赤岳の第一峰には大きなケルンが造られて、その間に六月三十日午後三時と書いて五人の名を連ねた名刺が挟まれてあった。彼等はこの辺りから千丈沢へ降ったものと察せられる(「赤岳より硫黄尾根追想」)

中山沢と命名されたところを見ても、この登山での中山彦一の尽力がなみなみならぬものであったことを物語っている。中山沢は、赤岳一峰と二峰間の鞍部から千丈沢まで走っている沢である。

ついでながら、硫黄岳とその南の通称硫黄台地の間から千丈沢へ流れ込む沢は、小次郎沢と呼ばれている。明治三十九年七月に当時の参謀本部の測量隊が硫黄岳に三角点を造るときに登った沢で、案内者長田小十郎の名が誤って伝えられ、小次郎沢となったものであった。この山は、そのころ焼山と呼ばれていた。硫黄尾根は、その後昭和十年から十四年にかけて、高橋と同じ法政の人達が主となって試登が続けられたが、昭和十八年四月、松涛明によって湯俣の末端から西鎌尾根のジャンクションまで全部が歩かれて、全容が明らかにされた。松涛は昭和二十四年一月に北鎌尾根を目標したが成らず、同行の有元の凍傷に



肩から望む小槍(48.7.22撮影)

より引き返して、千丈沢で消えて行った。全身硬ッテ力ナシ 何トカ湯俣迄ト思ウモ有元ヲ捨テルニシノビス、死ヲ決ス」とメモして「氷壁」のモデルとされている。

さて、赤岳を征服した土橋莊三は、寺島今朝一との小槍初登はんについては先に述べたが、この二人の北アのバイオニア・ワークも素晴らしかった。すでに大正九年七月九日には、槍ヶ岳北鎌尾根の初縦走もやっていた。この尾根の初縦走者といわれた大正十一年の学習院パーティーより二年も早かった。おまけに、上高地へ下った学習院パーティーは西穂高から奥穂高へ向かったが、奥穂高岳頂上近くから六人が岳沢の雪渓を滑り落ち、一人はクレバスに落ちてしまった。全員が助かったが、ザイルを止めた松方三郎は胸を締めつけられて気絶したという。

走より六年も前の大記録となる。三十九年というのは、槍ヶ岳の年間登山者が二十人位という時代である。

大正十三年八月には、寺島は熊井博人と組んで穂高の屏風岩を登って、北尾根を前穂高岳頂上まで縦走したとされる。屏風岩も前穂高北尾根も、その一ヶ月前に慶応パーティーによって初登はんが成されたばかりであった。屏風岩については、その後五年間も登はんの記録は跡絶えしたし、北尾根についてもいえば、完登という点ではこれが初登はんともいえる。硫黄尾根を終えた馬場は、続けていう。

「杉浦と自分がこの行を終ろうとして、槍の肩を越えて殺生小屋に降る途中、中山案内が、再び千丈沢に入るのだと言って、登って来るのに違ったことを記憶している」。中山彦一は輝かしい記録を、自分では全く繼がなかった。中山といひ、土橋、寺島といひ、情熱あふれる北アの地元の人達であった。(登山史研究)

海外登山あれこれ

武田 武

海外登山を行うにあたって、まず考えられることは、言葉の問題である。

言葉がよく通じないことから、数々の悲劇、喜劇が多く記録にも残っている。

ヒマラヤのギャチュンカン(七九二二米)遠征(一九六四年)のときのエピソードである。

遠征の規模は隊員十各、シエルバ三十名、クローリー(ポーター)三百五十名であり、期間中隊員には、一人に一人づつお付きのシエルバがいて、いつも行動を共にする。そして身のまわりの世話もしてくれる。シエルバのほとんどは片言の英語がわかる。中には現地言葉以外には全くわからないシエルバもいる。そんなシエルバとペアになった隊員は大変である。

ギャラバン途中で、小便、大便を隊員がするような時でも、いつもサーブ(隊員のことをそう呼ぶ、ネパール語で旦那という意味)の後を忠実にどこ迄も着いて行き隊員を困らせるという場面がよくあった。そんな時は、隊員は大使をする時の格好をしてみせて、着いて来ないで、ここでしばらく待つよううが身振り、手振りのジェスチャーで説明するがなかなか理解できない。そんな仲間の様子を遠くから見てみると、ハハーやつているなど吹きだしてしまふ。長いこと滑けいな仕草の後やつと意味が通じ隊員は、そそくさと藪の中へ消えて行く。

遠征も月日を経て終りに近くなる頃には、隊員も片言の現地語を少しづつ覚え、それに加えて英語をまじえ、シエルバも日本語が少

し理解できるようになって来、三ヶ月も過ぎるころは、日常登山活動の必要なことが通ずるようになって来る。

傑作なのでは次のような言葉もとびだす。

「ジャバニース、チャオチャオ、ベリー、ドッコイシヨ」。解説すると、「日本のインスタントラーマンは非常においしい」となる。

チャオチャオはネパールでうどんによく似た麺類で、最後のドッコイシヨは、高所で苦し



ギャチュンカン遠征時の筆者(テントの前)第2キャンプにて

い荷上げや、きびしい氷河のルート工作で一息つく時に雪や氷の上で腰をおろすに、隊員がドッコイシヨと言つてすわつた。それからシエルバの間で、嬉しいことがあればドッコイシヨ、食べたものがうまければドッコイシヨと、どこへでもこの言葉は良いことの意味に使われる便利な言葉になった。

ギャラバンの途中でオランダガラシ(別名クレソン)を見つけた。遠征期間中、新鮮な野菜は食べる事ができず、いつも乾燥野菜ばかりのときだったので、非常に嬉しかった。私ともう一人の隊員で川の中へ入り、隊員とシエルバが夕食に食べる位の量を探つてキリケンという現地人のコックに調理法を説明し、ゆでて浸し物で食べるように言つたところ、それは毒草で食べられない。人間の食うものではなく「ヒル」の食物だと言つて根や茎にたくさんついていて「ヒル」を示してなか／＼手を出してくれなかつた。何ヶ月振りに夕食に出た緑の新鮮なクレソンに隊員は舌つづみをつたが、シエルバはついに一人も口にしなかつた。

ギャラバンは毎日続き、数日してワラビがたくさんある峠へさしかつた。先日のオランダガラシといひ、また私の大好物のワラビを見つけて狂喜した。私がこれを探りはじめ、私付のシエルバ、ウオンリイ・ドルジェにも一緒に取るように言つた。ドルジェは私に、これをどうするかと聞くので、この間のオランダガラシ同様食べるんだと言つたところ、血相を変えて、とんでもない。これはネパールでは「トクサ」と言つて猛毒で食べばすぐ死んでしまうと、興奮して私には全く理解できないネパール語かチベット語で叫んだ。通じないとすると今度は「ベリー、

デンジヤラス、デース、ノー・ドッコイシヨ」とたてつづけに三ヶ国語の単語で危険だ、死ぬととびだしてきた。充分意味は通ずる。このときのノー・ドッコイシヨには笑うどころではなかつた。サーブの身を思う真剣な態度にはむしろ心を打たれた。ありがたく感じた。結局このトクサは医師でもある古原隊長のタケチヤン・サーブ(シエルバが呼ぶ私の愛称)は植物学者でありまちがいはないし、日本では「ワラビ」と言つて常用している山菜で灰でアクを取り食べることができるといふ説明で、シエルバ等は胸におちる納得はできなかった。隊員が食べる間、ラマ教の信者コックのキリケンは、オンマニベメフムと隊員の無事を祈り続けた。

非常に従順であつた私付のシエルバ、ドルジェと一緒に探るのだけはかんべんしてくれといつて手を出さなかつた。遠征期間中、そして私が再度カトマンズで過したとき、日本へ来訪二回と、以来二十年近いつきあいになる優秀なシエルバで、私の最も信頼できるドルジェは、後にも先にも、この「トクサ」の一件以外に私の依頼したことにノーと言つたことを知らない、大切な山仲間である。

(長野県山岳協会長)

博物館だより

資料ご寄贈ありがとうございました(敬称略)

土白 1点 大町市三日町 飯島清人

シヨクオリ ウキアミ、ネコ、ネコバタ

各1点 白馬村神城 中村恭二

ザグリ 1点 白馬村神城 中村知義

山と博物館 第26巻 第6号

発行所 一九八一年六月二十五日発行

長野県大町市TEL②〇二二

大町 山岳博物館

印刷所 長野県大町市

大衆タイムス印刷部

定価 年額 一三〇〇円(送料共)(切手不可)

郵便振替口座番号(長野二二二二九三)